

派遣者番号	R2K20	氏名	下田 久美子
研究主題 —副主題—	交流及び共同学習における教科学習の充実 —中学校における個別の指導計画の立案から評価までのプロセスに着目して—		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	浅野 あい子
所属	文京区立第三中学校	所属長	神山 洋之

キーワード：交流及び共同学習 教科における共同学習 個別の指導計画 ケース会議

## 1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

共生社会の実現に向けて大きな意義をもつ交流及び共同学習の全国における実施率は高く、その成果も報告されている（文科省、2016）。さらに、連続性のある「多様な学びの場」の確保のために、「教科等のねらいの達成を目的とする共同学習」の側面の充実が望まれている。

そのためには、特別支援学級（以下、特支学級）と通常の学級の担任の連携、関係する教科担当教員との情報共有が重要になる。一方、中学校における課題として、教員による情報共有の時間の確保や特別の教育課程、特支学級の教育課程への理解などが挙げられる。

そこで、本研究では、生徒の実態を多角的に把握し、教員相互の共通理解を図ることを可能にする個別の指導計画を活用し、中学校での教科における共同学習を充実させる教員の取組を検討することを目的とする。

## 2 研究の方法

### (1) 基礎研究

先行研究等から、交流及び共同学習を行うための組織的な取組や個別の指導計画の活用の現状や課題を明らかにする。

### (2) 調査研究

都内や他の自治体の公立知的固定特支学級設置校7校の特支学級担任又は特別支援教育コーディネーターに対し、半構造化インタビューを実施する。交流及び共同学習実施のための取組や個別の指導計画の活用の状況を把握する。

### (3) 実証研究

個別の指導計画の立案から評価までのプロセスに着目し、教科等における共同学習のための効果的な指導や支援につながる取組を検討する。

## 3 研究の結果

### (1) 基礎研究

佐古（2011）、伊丹（2009）の研究から、交流及び共同学習を進める上で、各教員の自律性を高め、協働することが必要であり、そのために既存の

校内委員会やケース会議を積極的な議論の場にしていく必要があることが分かった。

一方で、個別の指導計画の活用については、時間と労力の割に活用の有効性が感じられないといった課題も明らかになった（眞淵ら、2019）。

そこで、特支学級と通常の学級の担当教員が指導計画や手だてをともに考え、相互に理解できるような情報共有媒体を作成するプロセスが必要であると考え、「交流及び共同学習ガイド」（文科省、2019）を基に、「特別支援学級設置校における交流及び共同学習推進のためのプロセス」を作成した。手順は、「関係者の共通理解」、「体制の構築」、「指導計画の作成」、「活動の実施」、「評価」の五段階であり、筆者がそれぞれの意義、実施主体、具体例を示した。

### (2) 調査研究

基礎研究を基に、調査校で交流及び共同学習に対する考え方と特色ある実践を聞き取った。実践内容は、交流（日常生活や行事などの交流活動）と教科学習（教科における共同学習）の二つの側面に分け整理した。

調査から、教科等における共同学習を進めるプロセスには、「生徒の具体的行動への支援等を共有するために個別の指導計画を活用する」、「個々の生徒の情報共有、共同学習のねらいを明確にするための場を設ける」、「通常の学級の教科担当が評価や活動のねらいや支援に対する評価を行う」ことが必要であることが分かった。

### (3) 実証研究

#### ア 交流及び共同学習のプロセス

調査研究の結果を教科等における共同学習の充実につなげるため、「個別の指導計画を活用した情報共有」、「情報共有の場づくりを含めた体制構築」、「通常の学級の教科担当が評価に関わるPDCAサイクルを機能させる」という視点から、「交流及び共同学習のための個別の指導計画の立案から評価までのプロセス」を作成した（図1）。

立案準備 ▼	・生徒本人と面談⇒保護者と面談 ・「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」「個別の生徒理解シート」作成
関係者の共通理解 ▼	・職員会議での共通理解 ・ケース会議の開催（活動のねらい、支援の確認・討議・共有）
個別の指導計画の作成 ▼	・「教科における共同学習のための個別の指導計画」作成（特支学級担任） ・共有（PC）
活動の実施 ▼	・日常的な情報交換、週案の活用、学年会等 ・指導記録の共有（PC）
評価	・通知表での評価（教科担当教員） ・ケース会議でのねらいや支援の見直し ・個別指導計画の見直し（特支学級担任）

図1 交流及び共同学習のための個別の指導計画の立案から評価までのプロセス（筆者作成）

## イ ケース会議の実施とその有効性

図1におけるケース会議を都内公立中学校において実施し、共同学習への影響を実証した。複数の教科担当教員が一堂に会し、特支学級の生徒（対象1名）の通常の学級における授業参加のねらいを共有し、支援について話し合う場とした。

資料として、東京都の個別的教育支援計画を基に作成した「個別の生徒理解シート」を用いた(図2)。通常の学級の教員が対象生徒をイメージしやすいことや教科指導に必要であり適切な量の情報に配慮し、生徒の顔写真、実態、本人の役割が書かれた短期目標の欄を設けた。

会議の趣旨を冒頭に確認し、生徒の実態の共通理解を図ったことで、単一の教科や複数の教科に共通する生徒の授業の様子に対して具体的な意見が出された。一斉指導の中でできる合理的配慮、支援の手だてが共有されたことで、自己の見方・考え方の拡大、さらに、支援員と連携する意識の醸成が見られた。

1か月後に、会議の内容をまとめた「教科における共同学習のための個別の指導計画」を用いて、手だてに対する振り返りを行った。具体的な指導の実態や改善案が述べられたことから、教科担当教員がねらいを意識して特支学級の生徒に対応していることが確認できた。

ケース会議という場を通じて参加者が情報を共有し、相互に影響を及ぼすことで組織的な行動に転じていく様子や事後にケース会議で確認した手だてを教科担当教員が意識している様子が見られた。

このことから、ケース会議は、生徒の学びに向けて支援の幅を広げるとともに、校内で共有

することに有効であると言える。各教員が前述のような実践をすることは、特支学級の生徒の授業参加の意欲を高めることに加え、授業内やその他の場での生徒同士の関わりの拡大にもつながると考えられる。

作成日 年 月 日			
令和2年度 個別の生徒理解シート（交流及び共同学習実施に向けて） 1学期（4～7月）/2 学期（9～12月）/3学期（1～3月）			
ふりがな 生徒氏名	交流 クラス	年 組 担任:	<b>顔 写 真</b>
【生徒理解】			
1 生徒の実態【授業・生活に役立つ内容】			
【指示理解】		【行動】	
聞く:		書く:	
見る:		話す:	
【理解】		運動:	
読解:		集中力:	
計算:		【他】	
		対人関係:	
↓			
2 長期目標 学校生活への期待や成長への願い【教育支援計画を参考】			
本人			
保護者			
↓			
3 短期目標（今年度）……支援の目標 ↓ ○等を付ける			
場面	生活(総合)	音楽	美術
	道徳	国語	数学
		理科	社会
			英語
本人の役割	（参加するうえで努力すること）		
	.		
学校の指導・支援	.		
	.		
4 昨年度の様子・引継ぎ事項等			

図2 個別の生徒理解シート（筆者作成、一部抜粋）

## 4 研究の考察

教科における共同学習を効果的に行うためには、生徒の学習目標と支援について関係する教員間で共有するプロセスが必要である。また、本研究では個別の指導計画を中心に検討したが、教科等における共同学習の推進には、それ以外の要素、学校全体で取り組めるような位置付けや情報共有を図るための工夫が関わっている。誰が見ても分かるような生徒理解シートや個別の指導計画の作成など、特支学級と通常の学級の教員とが情報共有を図るための工夫も進めていく必要がある。

## 5 今後の展望

特別支援教育における学校全体での取組や教員の特別支援教育についての研修会の中で、本研究の成果を活用することができると思う。今後も実践を重ね、プロセスの改善を図っていききたい。そして、本プロセスが、今後予想される特別支援教育へのニーズの広がりにも対応することのできる一方策となるようにしていきたい。